

## 釜の蓋の朔き

七月の朔日(ついたち)は、俚俗に釜の蓋の朔日といわれて、地獄の釜の蓋は、この日に開くのだといわれている。この日芋畠にいて静かにきいていると、地獄の釜の蓋のあく音がきこえてくる。地獄とは、どん煩惱、しん煩惱、ち煩惱の三毒の具わる人の落ちるところで、八寒、八熱の大地獄で、えんま王が主権者であるといわれている。勿論仏教の所説であろうが、生前の悪をきつくいましめたものであろう。

## 車田

町の農家部落に「かねまき」という農家があった。おかねさんの家は先代から精農で、なんの不自由もなく暮らしていたが、日ごろ堅ぶつで通っていた亭主が、村の祭酒からぐれ出して家を外に身をもち崩し、ついに先祖伝来の田畑を人手に渡してどこかへ身をかくしてしまった。

働きもののおかねさんは途方にくれ、思いあまつた末、とうとう気が狂ってしまった。そうして毎日田圃を駆け廻っては、この田もあの田もおれの田だと叫びつづけるので、村の人々もほんとうにおかねさんは気のどくだと同情していた。ある時家にあつた糸車をかつぎ出して、前のように元自分の田であつた所を、駆け廻っていた時、足をすべらして持っていた糸車もろともその田にのめり落ち、可哀そうに悶死してしまつたのである。

## 奥谷の親捨

篠立ゾイドウを通過して奥谷に出て、高藤山に向かって行くと左手に新堰がある。この付近に洞窟がある。この洞窟は昔、親を捨てたものだといわれている。それがあつた時、伴がモッコ(背負い梯子)に親を乗せて捨ててきた。そして親とモッコを捨てて急いで戻ろうとした。親は伴の後ろ姿に声をかけた。

「モッコをどうする」

伴はぎくりとしてそこに立ちつくし、ただふるえているばかりであつたが、やがて、

「いらぬ、おいていくさ」

懸命に走り去ろうとした。親はまた呼びとめて、ゆっくりとさとするようにいった。

「このつぎお前のくるときどうするんだ」

伴はこういわれて親の顔をじつと見返しているうちに、捨てた親にすがりついて泣きつづけた。そして親をまたモッコに乗せて家に戻った。それからは親を捨てることがなくなつたということである。

## デーデッポ

町の山側には貝塚があるが、これは伝説ではデーデッポの足跡ともいわれている。今から千二百五十年も前の奈良時代の初め、和銅年間の「常陸風土記」にこのデーデッポのことが次のように記されている。

それからは、この田を作つたものは必ずたりがあつて病人がでたり、奇病で死ぬ者がでたりした。そしてついに耕作をするものがなく、地主はたたりをおそれお寺に寄付した。それからこの田を「車田」というようになった。

戦時中食糧増産に一と役買つてこれを耕作したところ、その作り手は判らぬ病気で永年なやみぬきついに死んだ。今でもこの田の誘蛾灯だけが、宵のうちいつの間にか消えるというので部落の人々は、また車田の誘蛾灯が消えた、と気味悪がっている。

## 乳神様

内宿部落から柚木部落を経て篠立ゾイドウに入ろうとする左手に小さい祠がある。この祠のそばにこんこんと湧きつづく泉がある。どんな旱天にも決して涸れたことのない清水である。これが乳神様といわれている。

この泉はいつの頃からかわからないが、女の人がこれを飲むとお乳がよくでて、育児によいといういい伝えがある。昔平広常が生まれた時、母乳が足りなくて困っていることを聞いた里人は、この水が昔から乳の妙薬だといって使われていることを申し上げた。

そこで早速この水を取り寄せて飲ませたところ、不思議に乳がよく出たというので、それ以来この水は、乳の水といって珍重され、そこに祠を建て乳神様をおまつりした。乳の出ない女の人がこの水を貰いに来たのは、戦前迄続いていた。

大昔、とても大きな人がいて、丘の上に腰かけて長い手を差し伸ばして海の貝を取って食べたのが積り積つて丘になつたという。また古く宮中に伝わつたという有名な「荒磯屏風」には脚ばかりがひょろ長い大男が、クモのように手の長い大男を背負つた奇怪な絵が書いてあるが、この手長と足長の男が山の上において海から貝をとって食べたという話もある。

そしてこの男の足跡から判断すると、身長は約九十米、ざつと丸ビルの三倍もある雲をつくような巨人だと考えられる。デーデッポは富士山を引張ろうとして藤づるをさがしたら、自分の髪の毛よりも細いので腹をたて、東京湾を渡つて千葉から東の方へ行つたという話もある。長生郡ではライラッポといい、神話の大多良男の神であるとか、ギリシヤのタイタンスの変化であるとか考証がある。デーデッポの足跡は、九州から東北地方までの各地に分布しているが、千葉県には特に多く、当町も字小池にある。

## ぼた餅田

一宮町に、ぼた餅田といわれる田があつた。この田の所有者は、作男が横着で、家人が見ていないと遊んでいて仕事をちつともしない、なんとか働かせる方法はないものかと考えた末、一策を案出した。

ある朝、主人はその作男を呼び、「お前は、見ていないと仕事を怠けていて困るではないか、今日は、あの田の草取りをやつてしまえ。そうすれば、お前の好きな物をご馳走してやる。もしそれが終

らなければ、食べさせないぞ。」と申し渡した。

そういつて主人は、男に知られないように、そおつとその田の中へ、牡丹餅（器に入れて）を置いて来た。

主人の考えは、横着をしないで草取りをして来れば、これを見付けて食べるだろうというところにあった。

それとも知らない作男は、例によって仕事を怠け、田の周囲だけしか草を取らないで、全体の草を取りを終わったように見せかけて、家に帰った。

主人は、完全に草取りを終わって、田の中のご馳走を食べたものと思っているから、何も食べさせなかった。

もともと頭の弱い男であったし、主人が今朝ほど「草取りが終らないと食べさせないぞ」といつていたから、俺の仕事を見ていたのかも知れない。だからなんにも食べさせないのだろうと、作男は自分の行為を恥じ、自から首を縊ってしまった。

それからというもの、この田を耕作するものは、怪我をしたり、病気になるたり不吉なことが起こるので、誰いうとなく、作男の祟りだといひ出して、しまいは、その田を耕作する者がなくなってしまうた。

そこで主人は、檀那寺へどうしたものか相談にいつた。それを聞いた和尚さんは、早速牡丹餅を作らせ、その田へ供え、ねんごろに作男の霊を慰めてやつた。

それから、病人や怪我人が出なくなり、稲の作柄もよくなったので、毎年牡丹餅を上げて供養を行なつた。そのため、この田のこ

### 神霊の明珠

八月十二日夜、五兵衛の枕元に一人の貴人が現われ、「わが一子を汝にゆずるから、太東八丁<sup>(町)</sup>に迎えに出て、これを玉前大明神と仰ぐべし」と仰せられた。

五兵衛は、翌日弟の五郎右衛門を連れて、太東前にいつて見ると、東風に随つて光る物が流れて来た。なんだろうとよく見たら、立派な錦の袋であった。

五兵衛は、「夢知らせの神霊」と塩垢離をとつて身を清め、「搗和布」という磯草を下に敷いてすくい上げ、近くにあった豆がらの上においてひと休みをしていた。

そこへ、甚右衛門がやつて来たので、昨夜の夢知らせから、この錦の袋を拾つたまでのいきさつを聞かせると、甚右衛門も不思議にして、三人で恐るおそるその袋を開いてみた。

袋の中からは、縦三寸、横三寸長さ三寸五分位の箱が出てきて、その中に光った「霊玉」が入っていたので、三人は驚いて箱の蓋を閉め、神罰をおそれて早速神社を建立し、その箱を納めて日々崇敬怠らなかつたという。

これが今の玉前神社だといわれている。また、一説には、十二の光った玉であったので、これを別けて祀つたものが現在の一宮、椎木、中原、和泉、綱田の玉前神社、二宮、三宮、玉垣、鶉羽の各神社だともいわれている。

そのため、この東風によって海岸に吹き寄せられた錦の袋を拾つ

とを、「ぼた餅田」というようになった。

### 白鳥の井戸

日本武尊（ヤマトタケルノミコト）が東征を終り、京へ凱旋の途中、伊吹山で病没された。その時ミコトは、一羽の白鳥と化して東の空へ飛び去つたと伝えられている。

この白鳥が弟橘姫（オトタチバナヒメ）の亡くなられた上総の國へ飛んでこられ、当地の玉前神社の上空を高く低く飛び廻り、何かを求めている模様であった。その時、白鳥の羽根が一枚ヒラヒラと舞い落ちて来て、神社境内にある大井戸へ吸い込まれていつた。

この井戸は、昔から太東岬の近くの白鳥の湖に通じているといわれ、どんな時でも井戸水が枯れたことがないといわれている。この井戸に羽根が落ちた途端、太東岬の近くにある白鳥の湖に、一羽の雌の白鳥が現われ、玉前神社の上空を舞っている白鳥を呼ぶのであつた。

これを見た白鳥は、すぐにその白鳥の湖に飛んで行き、湖上の白鳥と仲睦じく語り合つたといわれている。

やがて日が沈みかけた時、その白鳥は、名残りを惜しみながら西空を指して飛び去つたという。残つた白鳥は、弟橘姫の化身であると語り伝えられている。

このため、この羽根の落ちた井戸を「白鳥の井戸」と呼ぶようになったという。

現在玉前神社の境内にある大井戸が、それらしい。

た五兵衛と弟の五郎右衛門は、風袋という姓を名乗ることにしたと上総国玉前大明神の由緒（高原家の文書）に記されてあつた。

### 東漸寺の俵薬師

俵薬師のことを東方薬師瑠璃光如来といわれている。この薬師は一宮本郷村の一老漁夫定右衛門が、ある日沖合に出て網で魚を取っていると、網にかかつたものがあつた。そこで引き揚げてみると、魚ではなく木仏薬師如来であつた。定右衛門はびっくりぎょうてんした。薬師仏は、その老漁夫に向かつて「汝ら篤く尊信せよ。我もまた衆人愛敬の愛染明王なり」といつた。老漁夫は有難く思つてそれを枯木の中に入れてよすると、忽ち消えてしまった。漁夫は不思議に思いながら十八歩の地に船板をしき、俵に入れて積み重ね、これを尊信した。伝えてこれを俵薬師と呼んでいる。ときの城主正木大膳種成は、俵薬師を信仰していたといわれている。

### 上総の鳴山の怪音

東浪見の鳴山に、海の鳴るような音のところがあつた。房総志料によると、むかし虎海村の浦辺に山があつて、それが鳴山で、毎日風雨の音をきかせた。それが海気の怪音となつて響いてくるともいわれた。同志料には然れどもその声甚だ閑寂にして緩急なし、海気に関せざる事となしと書いてあつた。鳴山は名所の響山であろうと上総志にはあつた。房総一覽志によれば、或る者は鳴山の下には上総の鳴る海が埋まつているのだらうという。

一宮町観明寺内のきょうどまちの井戸へ投げ込んだお経文が、太東岬へ流れ出たともいわれている。また、千田（長南町豊栄）の如來様は、舟の中に浮かんだまま鳴山の近辺にあがったともいい伝えられている。

鳴山の下は、上総の鳴る海が埋まっているという伝説が、真実であるならば面白いことである。現今、この潮は鳴山の下になってしまいい、その海潮は渦巻のために鳴っているばかりといわれる。そのむかし、虎海の浦は、南海の潮水朝宗の地であったと古書にもあるが、ヤシその他のものが多く砂ぎわまで漂ってきたという。いまでも南方のものが浜に流れついてくると聞く。

#### 一宮のあごなし

むかし、上総の一宮城主のことを「あごなし御曹子」といつていた。房総志料や房総雜記によると、あごのことは乳母のことで、なしは産という意味だそうで、『あごなし御曹子』は乳母が産んだ御曹子のことである。南留別志の荻生徂徠の上総方言集には、子を産むことを子をなすと書かれてある。房総地方では、子を生んだかどうかということをしたか、なさないかといっている。これらの語言からきているらしい。

#### 九十九里浜のいわれ

九十九里浦と俗にいわれている地は、むかし長柄郡と称し、虎海浦より山辺、武射の両郡山武郡を経て上、下総の界である栗山川に

至り、それより下総の地海上郡川津、小屋舗の海浜地帯をすぎて、同郡飯岡の浦に至るまでの行程十五里ばかりの一带の砂浜をいう。むかし、六町を以て一里とし、源頼朝がこの海岸を測したところ、一里ごとに矢をさして九十九本を要したという。このことから九十九里の名称が生まれたといわれている。

#### 一宮のなんじゃもんじゃ

玉前神社境内にある霊木を土地の人は『なんじゃもんじゃ』と呼んでいる。房総一覽志によると、貝多の一種と称しているが、この樹木は約一丈八尺ぐらいあり、葉は厚く、頑強な木で、花の実はならないという。この原種のことを『いすのき』とか『なぎ』ともいわれている。

#### 蓮華往生

天明年間、上総一宮の在に蓮長寺という寺があった。上総七里法華の信者や一松郷の篤信者の修業道場として、法華大鼓の音も高らかにお題目を唱える人々で賑わっていた。あるとき、江戸から日秋という僧がこの道場を訪ずれて、『罪あるものの救われる道は、お題目を唱えながら往生できる『蓮華往生』の修法によるほかはない。ここは法華靈現の聖地であるから、蓮華堂を建立してこの修法の利益を当地の信者にほどこしたい。』と申し入れた。

日秋は容色も気品があり弁舌もさわやかであったので、信者たちはこの言を信じ、『蓮華往生』の道場として蓮華堂の建立のため浄

財をあつめ、日秋に当地にとどまってこの法を修むることを願った。

なにしろ、このお導きによると、この世の苦しみにたえかねた者も、悪をおかした罪あるものも、安らかに極楽に旅立てるというので大変な評判であった。

蓮華堂の落成をまちかねて、多額の往生料もいとわず『蓮華往生』を望むものが数知れないほどの盛況であった。蓮華堂には、高さ三メートルぐらいの花崗岩の台石がすえられ、そのうえに金色の八葉の蓮華が開花の状で安置されていた。「蓮華往生」を望むものがこの中央にある席につくと、花はしすしすとしぼむ。そこで衆僧は大声に読経し、数百の信者は、うちわ大鼓をうちならし鐘をたいてお題目を唱えて、極楽往生を祈念する。しばらくして再び開花したときは、ねむるが如く安らかに往生しているというわけである。

このことを聞きつた一宮の侯客法華丈助は、蓮華のなかで、下から何かで突きあげられて殺されるものにとらんだ。南無妙法蓮華経の背中に入れ墨をはだぬぎして、「俺も一つ頼みたい。」と申し込んだので、僧侶たちも名の売れた法華丈助のこととて、信者に披露して、早速とりかかることとなった。一方、丈助は、この伏魔殿の秘密をあばこうというのであるから、一計を案じて、鏡を尻のところにあてて身を守ることにした。案の状、法華大鼓の音も高まり、お題目の声が狂信的になってきた頃、下から鎗で突きあげられたが、丈助もとより覚悟のうえであるから、たくみにかわして、蓮華の開くの待ち、開花するや躍りあがってとびだし、「ヤイ悪党ども観念せよ」とせまったので僧侶たちはビックリ、かねて潜伏させてあつ

た手下と共に日秋一門をとらえて、代官に引き渡したという話が伝わっている。

この話の寺は、茂原妙光寺・房州三原の妙光寺ともいわれ、上野の延命院事件とも混同されて伝わっているが、明治初年の講談や読物に取り入れられているものである。

#### 俚 諺

- 朝焼雲の散った時は風、曇った時は雨となる。
- 朝降り出した雨は、長持ちしない。じきにやむ。(朝雨は、みのをぬけ)
- 秋は山、春は海の方があかるければ、天気は大丈夫。(秋山春海)
- 雨が夜中に上がった時は、その天気は永持ちしない。(夜上りは、じきに降る)
- 雲の峰が海の沖に聳えて見える時は、強い西寄りの風になる。
- 夕焼け空の翌日は、天気がよい。
- お月様が、笠を冠ると近いうちに雨となる。
- お月様が、笠を冠っても、笠の中に星が光って見える時は、雨は降らない。
- 辰巳(東南方)に黒雲が出ると冬でも暖い。風雨がくる。
- 軍荼利山の上に入道雲が出れば雨。
- 雨の降る前には、杭の芯が湿ってくる。
- 海岸から見ると、西北に入道雲が出れば、二、三日中に雨がふる。

- 夕方海上に入道雲が出て、その雲にぬきを通した時は二、三日中に雨が降る。
- 霜が早く融ける時は風となる。
- 磯がぬかると暴風雨がくる。
- 中天晴（夕飯時中天が明るく根雲が四方にあること）は風雨の前兆。
- 秋空の辰巳に黒雲の上に白雲が蔽っていれば台風がくる。
- 浪立ちに、風が同時に襲って来た場合は、容易ならぬ天候である。
- 川底がゆかると大雨がふる。
- 夕虹は、照となる。
- 日当たりのチラチラ降りは、照のもと。
- いなさのあげ雲は雨。
- しらたが引込めば雨。
- プヨウが出ると、天気が変わる。
- 夕方子供が騒ぐと、あした雨。
- 土用あけの、さっざ降り。
- 上総木棉にじょうがない。
- ばくち打と、なれの風（西南風）は、夕裸ゆげ。
- 上総の一つ残し。
- 上総豊年、米喰わず。
- 一人子にはなれても、植しつけには、離れるな。
- 照に飢饉がなく、しけには飢饉。

## 観光

東の大磯 一宮町は古くから、「東の大磯」とまでいわれた別荘地であった。

それが最近では、海、山、川とめぐまれた理想的な観光地として、広く一般からみなおされてきている。東京から約八十軒、鉄道で約二時間、常に気候は温暖、湿度のひくい住み心地のよいところであり、特に避暑地としては全国的に名が高い。

海産物、農産物が豊富で、保健衛生上からも最適の地である。虚弱児童の教養施設として一宮学園があり、近年は都学童の臨海学園の地としても数多く利用されている。

町当局においては、昭和三十八年度から一宮町新町五ヵ年計画にもとづき、観光開発にも積極的のりだすこととなった。昭和三十八年八月十九日、一宮町観光開発株式会社を設立発足せしめたのも、その成果のひとつである。

最近における町の観光開発方針は、およそ次のとおりである。

### 〈構想〉

数々のめぐまれた資源を、多角的に活用し、将来、一大観光地とすべく資源の開発、観光施設の整備を行ない、九十九里地帯の中心

- 山の神は嘘をつかない、浜の神は嘘をつく。
- 陸稻を三年作れば貧乏する。
- はだては鬼。
- 知らない雑魚商をやるなら、秋田の尻を止める。
- つぶれた大尺の家屋敷跡は、な畑となる。
- 草取り田二十日
- 種浸（たねげし）二十日。
- 信友田地、面広（つらっびろ）
- 宮原もんく（宮原では文句が多い）
- 大騒ぎ関東台（関東台ではじきに騒ぎ出す）
- ぐっちゃんぐっちゃんの待山。
- おじ村の道祖神（次男坊が多い道祖神）
- 宮敷の南天、花が咲かないで、実がなる。（宮敷とは旧玉前神社の神主家で権勢を持っていた）
- 城山は崩れても、吉野は崩れない（吉野という盛んな家（現岩波書店、常務吉野源三郎の生家）が城山の下にあった）
- 九十九里は、目はしり。（九十九里浜で仕事をする人はすばしくなければならぬ）

観光地として発展せしめると同時に、果樹、蔬菜等農産物を観光に結びつけることによって、農水産と均衡のとれた新興都市づくりをする。

### 〈人口規模〉

一宮町は昭和三十六年三月三十一日現在、人口一、二二二人である。

将来の人口規模は、県長期計画によると、昭和六十年に一六、〇〇〇人と推定されており、前記の構想にもとづいて観光事業の開発を精力的に行なうことにより、人口も飛躍的に増加することが予想される。

その予想人口は、昭和六十年において約二〇、〇〇〇人がかぞえられ、ために産業構造も変化をきたし、第三次産業が大幅に増加することが考えられる。

### 〈観光計画〉

観光道路の整備を図り、循環線として海岸—市街地—洞庭湖を結ぶ。

集団施設地区として新一宮橋より鳴山に至る約四キロの旧防風林

を中心に、約六〇町歩にわたる開発を行なう。

また、中之橋左岸より下流に向って約二キロにわたる地方を開発する。

一般施設については、現在工事中の公民館、福祉センターの他、昭和三十八年度に国民宿舎、昭和三十九年度に老人ホーム、また旧施設を最高度に活用しての観光ホテル、高級旅館の建設、遊園地、駐車場（十六メートル道路計画、有料駐車場）の新設、各会社、保養所の誘致などを行なう。

海水浴場施設については、海岸一帯の保安林、砂地、私有地、町有地、私有地を含めて整備する。設備するものは、レストハウス、プール、駐車場、臨海学校、展望台、シャワー、休憩所、脱衣所、ユースホテル、児童遊戯施設、キャンプ場、バンガロー、便所等である。

これ等施設の施行は、民間の電鉄会社、不動産会社等の企業を積極的に誘致して行なわせ、観光株式会社を通じて大々的に開発し、国及び県の助成による設備資金の融資、利子補給等をもって観光ホテルの新築をはかる。

洞庭湖公園については、洞庭湖周辺の山丘地帯の美景を活用し、県立公園の指定をうけ、ハイキング地帯として休養施設等の整備をする。

#### 〈土地利用〉

土地利用は、昭和六十年における人口に対応するよう、総合的見地から、都市施設を十分考慮し、現在の都市計画を再検討する。

意見書を提出している。

「海水浴場地として発展している所に、須磨、明石のように風光明媚な所と、大磯のような静かな別荘地とがある。一宮の場合は後者に条件が非常に似ている。

大磯にどうしてあのように別荘ができたかを調べてみると、大磯の町では、財界の大物、安田善次郎氏を招いて別荘をつくって貰った。そして安田氏が大磯のよさを何かにつけ宣伝したので、沢山の別荘が建ったのである。一宮もこれにならない、財界の大物を招いてはどうか」

この意見書にもとづき、加納子爵は財閥の三井八郎治郎男爵を招いて別荘をつくって貰った。(その別荘の跡が現在の一宮学園となっている) 三井男爵の令息は非常に身体が弱かったのであるが、一宮に来てからすっかり健康になり、これが三井家の人々を喜ばせ、それが伝えられて別荘を建てる者が多くなった。また、加納子爵自身も海岸に別荘をつくり、いろいろの人を招いて一宮を知らせたのである。一宮海岸に軍人の別荘の多いのは、加納子爵が鹿児島県知事として非常な功績があり、鹿児島県の三恩人の一人に数えられているほどの人物であったので、鹿児島県人の往来が繁く、殊に同県からは沢山の軍人が出ているために自ずと軍人の来訪も多く、殊に一宮海岸の男性的なところが軍人に好かれ、東郷平八郎大将もよく遊びに来られた。

四、土地の人が純朴で、親切な上に、生鮮食料が豊富である。

五、空気と水の綺麗なことは他に比をみない、と当時の新聞など

#### 〈その他〉

道路街路網の整備を図り、房総東線の複線化を促進し、快速電車の増発を行ない、一宮駅は東口を開設させる。また駅より海岸までのバス交通の整備を図ると同時に、観光船の運営を高度のものとする。

河川整備についても、一宮川護岸の築造と相まって川添い道路の改善を行なう。

更に一宮河口整備を促進し、漁港としても活用できるように考慮する。

教育、文化、産業についても、人口増加にともなう教育、文化施設の整備、産業の振興等、現在立案中の農業構造改善事業とあわせてこれを行なう。

避暑地としての歴史 一宮町が避暑地として発展した理由は、次の五点に示られるようである。

一、網田出身の先覚者に、関五郎右衛門という人がいた。氏は長柄郡長から千葉県文書課長となり、退官後、一宮海岸に海水浴旅館「青松館」を経営して多くの都人士を招いた。(写真集参照)

二、房総鉄道が両国から一宮まで開通(明治三十年)し、内房外房の海岸としては最も早く交通事情にめぐまれた。

三、旧藩主で貴族院議員の加納久宜子爵が開発に努力された。加納子爵は、一宮を海水浴場地として発展させる方策を、時の町長中村裕吉郎に考究させた。

中村町長は、全国の主要な海水浴場地を視察し、大要次のようなでとりあげられた。一宮海岸が最も賑ったのは、大正の終りから日華事変の起った昭和十二年頃まで、一時は総理大臣齋藤実、枢密院議長平沼騏一郎、陸軍の大御所上原勇作元帥、衆議院議長秋田清等の巨頭が一堂に会し、政治の中心が一宮に移ったような状態であった。

避暑客の滞在がふえ、旅館が足りなくなりました。学生の軍事教練、陸軍の演習のため廠舎が建設された。昭和九年のことである。ところが、日華事変を契機として、世はめまぐるしく変転した。避暑客も次第に減り、海岸は本格的に陸軍の演習地となった。戦争が苛烈になるにしたがい、軍人だけでなく学生の軍事教練もまたさかんになった。

そして、太平洋戦争に突入すると、都市は人口の疎開を行なった。このため当地にも沢山の疎開者が入り込んできた。殊に終戦近くになると都市に対する爆撃が激しくなり、罹災者が多くなるにつれて、別荘は一般の住家となってしまった。やがて終戦となり、占領軍の指令で農地法と財産税法が公布され、別荘所有者は多額の財産税を徴収され、また農地法により別荘内の農地が留守番人の手に渡る等のことがあって、別荘はほとんどなくなってしまった。その後、日本の経済の発展から、最近では多くの人たちがレジャーやバカンスを楽しむようになり、再び一宮が海水浴場地、別荘地として見直されるにいたった。教員組合、日立製作所、その他の会社の保養所、名士の別荘が建設され、本年は国民宿舎も建設が予定される状態である。

ある。

**別荘** 海軍大将齋藤実男爵が、旧一松村字船頭給の荒地に別荘を建てたのは、明治三十四年十月のことである。以来、一宮川岸にも、名士の別荘が次々と建てられ、やがてひろい別荘地帯をなすにいたった。

当時のその別荘地帯は、三つの区域に分けることができる。町の西から、字城内、老女子、本給地区の山間部には、次のような名士の別荘があった。

子爵加納久朗、伯爵伊達宗勝、侯爵山内豊影、法学博士志田鉦太郎（一宮実業学校初代校長、前明大総長）、藤崎隆治郎、川島忠之助、渡辺亨、伊吹山次郎、栗津清亮、大岡景、元学習院大学教授金田鬼一の諸氏。

一宮川岸松林付近の字野中、河原、離島、竜宮、下竜宮、林下、三保松、物見台には、前総理大臣、男爵平沼騏一郎、子爵大河内正敏、元帝大（東大）教授理学博士俵国一、法学博士中村進午、帝大（東大）教授工学博士鳳秀太郎、元貴族院議員河村善益、元満鉄副総裁国沢新兵衛、法学博士松岡義正、元復興局長官清野鴨太郎、工学博士中村達太郎、医学博士難波一、子爵河瀬真、元瑞典時命全権公使畑良太郎、元北海道長官田中清助、河村大審院判事、黒川大審院判事、医学博士高山恵太郎、復興院総裁高梨博司、安田銀行重役竹内第三、三味線杵家信吉、加藤純吾、杉浦甲子郎、清水一雄、袴田喜四郎、画家山内多門、渡辺正磨、上原勇作元帥、齋藤内府、土岐子爵の諸氏。

辺りの海岸の景観は、九十九里浜の雄大な風光を代表するところとして広く認められている。白い砂丘とみどりの松林に感じられる魅力は大きい。

一宮海岸はまた、海水浴場としてもひろく世に知られている。海水浴場には安全区域をえらび、動力シャワー、脱衣場、宿泊設備、救助施設等を完備させてある。

海岸一帯の松林は、キャンプの好適地でもある。毛せんを敷いたような芝生に臥し、濤声松籟をききながら夢を結ぶのは、甚だ趣のあるものである。

昭和三十七年八月、一宮町子供会育成協議会のひらいた鳴山キャンプ場には、延一千人の学童があつた。将来は諸施設の整備を期し、ひろく他町村及び諸団体にも呼びかけ、青少年校外教育とあわせて観光誘致のために一役になわせることになっている。

**一宮川** 駅より右折して鉄道線路に添って約百米ほどのところ、町を横断して海に注いでいるのが一宮川である。両岸には葦が一面に生い茂り、葦切りが鳴き、流れは極く緩やかである。夕涼みに舟を浮べる時は「吹けよ川風すだれ越し」そのままの水郷情緒を味わうことができる。また川は浅いので婦女子の遊泳には最もよく、川口海水浴場にはシャワー、脱衣場、休憩所等の設備もある。川中には鯉、鮒、鱈、ボラ、うなぎ、はぜ等があり、釣天狗連の腕の競い場所でもある。夏期はこの川と海を結ぶ交通機関として渡船がある。通称ボンボン船といい、対岸の自然美を眺めながら、汐風を胸一ぱい吸って行くのも甚だ趣きのあるものである。

一宮川の北、すなわち字大河原、船頭給、新地には、

前総理大臣子爵加藤友三郎、前海軍大臣齋藤実、前大審院判事前田直之助、子爵戸田康保、海軍中将河原要一、貴族院議員橋本圭三郎、海軍少将中山長明、陸軍中将隈元政次、同牟田敬九郎、西村陸軍中将、大迫陸軍大将、三好中将、松原中将、吉益大将、仁礼中将、勸業銀行理事佃一誠、前京都市長馬淵鋭太郎、前帝国生命保険社専務取締役北里袈婆男、前総理秘書官木村甚三郎、東亜煙草会社社長佐々熊太郎、日銀総裁富田鉄之助、衆議院議員守屋栄夫、同秋田清、実業家三井八郎右衛門、同橋本圭七郎、同大橋新太郎、坂田男三郎、佐竹侯爵、日本セルロイド会社社長駒沢傳吉諸氏等の別荘があり、そのほか宮原地区一宮橋川岸には、伯爵南部利淳、画家北村楽天、棋士土井八段といった諸氏の別荘があり、上流には現在もなお毎日新聞最高顧問高石真五郎の別荘がある。

そして一宮町を訪れた名士も数多く、東郷平八郎元帥、尾崎紅葉、芥川龍之介、久米正雄、林芙美子、吉屋信子、森律子等の名が挙げられる。

**一宮海岸** 駅より二軒、黒潮の香りも高い太平洋を一望に、荒磯松の雅趣ある美しさと、砂丘の雄大な景観を誇る一帯が房総十二景に選ばれた一宮海岸である。砂丘に立てば、南方指呼の間に太東岬を望み、北の方は、犬吠灯台の光芒を遙かに眺めることができる。地曳網、荒磯の海釣などは旅情をなくさめる美しい風物詩であり、旅の味覚を楽しませる海の幸の宝庫ともいえる。太東岬から銚子犬吠岬まで、弧をえがいた海岸線が九十九里浜と呼ばれており、この

現在は少なくなったが、昔はこの川でとれる黄鯢は旧幕府時代より献上鯢として有名であった。（渡船料金大人片道三十円、小人十五円、所要時間約二十分）

**山丘地帯** 町の西側の山丘地帯には、洞庭湖、綱田堰、両竜湖、軍茶利堰、高藤山、軍茶利山などの景勝地が多く、林道の開発にもない、ハイキングコースとしては好適である。湖や堰の存在は釣り師に喜ばれている。

**洞庭湖の桜** 一宮駅より約二キロ。桜樹が多く、シーズンには臨時バスも運転され、花見の宴にボート遊びに、たいへんなにぎわいを見せる。町主催の写真コンクールなども行なわれる。

**城山のつつじ** 一宮小学校の裏山は、かつては一宮城の外郭であったので、現在でも城山と呼んでいる。山頂に登ると町内が眼下に見下され、太東岬から遠く銚子に延びる渺々たる太平洋を見渡せる、眺望のまことよいところである。

この山の中腹に、鳥居のたった墓地のあるのは、一宮町の恩人・加納久宜公を、おまつりしてある。

城山の頂上には、三島神社がまつられていたことがあり、その跡に明治、大正時代、海上を航行する船に、気象を知らせる標識塔が設けられていて、昼間は丸や三角の標識、夜間は標灯がつけられていた。

また北側の中腹は、桜山と呼ばれ、桜の名所であったものが、大正末期にはすっかり荒れはてて、竹やすすきの山と化してしまっ



昭和三十年、この山の所有者が山を売りに出したが、買手がなく困っていた。その折、たまたま初代の住宅公団総裁に就任の加納久朗が、城山中腹に眠る父君の墓参に来町して、そのことを聞き、町民の憩いの場を作る目的でそれを買い取り、多額の費用を投じて荒地を起し、つつじと椿の苗を植えた。

これを聞いた加納家の親戚の後藤文夫(元内相、臨時首相)、麻生太賀吉(炭鉱主)、立花種恭(元貴族院議員)、伊藤幸雄(元会計検査院長)友人の原田吉郎の諸氏からいろいろの樹木が寄贈され、寺園鹿兒島県知事は鹿兒島のつつじ各種と、しだ類を沢山送り届けて来たので、城山に植えきれないほどになってしまった。

加納氏は城山全体を、つつじと椿の名所とし、見晴台にはジュラルミン製の四阿(あづまや)を建て、来遊者の休憩所とし、更に後方の台地一帯を買い入れて公園を作る考えで、土地の所有者と交渉していたが、所有者の協力が得られず、計画を進めることができないでいるうち、県知事に挙げられ、激務に倒れて遂に計画が実行されなかったことは、なんととっても惜しいことである。

しかし、氏の考えの一部は既に立派なつつじの山となり、春四、五月の頃になると、全山が花に覆われ桜の敷った後の町民の目を樂しませるに十分なものとなっている。

名物 以前には故浅野周助の製造の鱈デンプ、鯉塩辛があったが、現在は角八商店の九十九里煎餅がある。これは志田鉀太郎、粟津清亮博士の肝入りで発売されたもので、同図案は有名な梶田半古先生の作である。また次に掲げる安積良斎先生の詞が入っている。

# 文芸

## ○ 一宮

一宮へ行くとして山路たどりて(口まめ草)

大原 幽学

雉の声降るよと思ふ山路哉

上総一ノ宮にて(日記拾遺)

大原幽学は名を実生、静斎と号す。十八歳で脱藩、諸方を歴遊し香取郡中和村長部に留り、道学を教う。安政五年三月自刃、六十二歳であった。

## ○ 一宮

安積 良斎

遊覽誠堪樂。奇聞亦解顔。川為無委水。峰是有声山。  
瓊宝從淵出。巨鯨排浪還。丈夫長八尺、頼首入柴關。

雲海茫茫望壯哉 平沙薄暮独徘徊  
似蘆船接九天去 如屋波從萬里東  
烟靄合邊疑結壁 雪山崩處激奔雷  
直連東極終無地 唯有金鳥往復回

(写真集参照)

旅館 一宮ホテル(駅前)、一の宮館(海岸)、松濤軒(駅前)、  
つるや旅館本店(駅前)、友栄旅館(警察署前)



(註) 遊覽して誠に楽しかった。また珍しい話を聞いて愉快になった。川は無心に流れて山は何事かを語るようだ。淵からは玉(蜆の意)が出るという。大きな鯨が波を切って陸近くを行く。若い男は身丈が八尺もあり頭を下げてあばら家の門をくぐる。

安積良斎は寛政二年岩代郡山の生まれ、通称を祐助といった。佐藤一斎、林述斎に学んだ江戸時代の文章家で、昌平学教授をして萬延元年七十一歳で歿した。

## ○ 一宮

北条 鷗所

松際微月曙。零露繁於雨。披襟受海風。曉影涼入戸。  
己脱襪襪中。此心静無暑。苟能齊得喪。世味何甘苦。  
忘言怛然座。沙鳥近人語。身同不繫舟。随波一容與。  
欸乃破烟來。離岸數聲鷓。

(註) 松の木の間は月が明かかって夜は明けて行く。露は雨よりも繁く、襟を開いて海の風を入れると、朝日の光が涼しく室に入る。既に自分は仕官を去って布衣となっているので、心は静かで暑熱を感じない。仮にも世事を捨て俗事を離れると世の中の苦楽は身のかかわる処でない。世事一切を忘れ心安く静かにすわれば、海鳥はひとの話し声の如く近くに聞こえる。自分は驚がない舟と同じに、悠々と波の間に漂う。霧を掻き分けて船明が聞こえて来る。岸を離れて行く體の幾つかの音がひびいて来る。

○ 一宮川

村山 格堂

鱸魚新釣一輕舟。 閒與閑雲湖上浮。

莫笑生涯世情薄。 風清蘆白蓼紅秋。

(註) 鱸を新たに釣ろうと一艘の小舟を乗出して、漂う雲の如く静かに湖上に浮かんで釣糸を垂れた。生涯世情に疎いということに笑い給うな。今や風は清く、蘆の花は白く蓼の花は紅に匂う秋もさなかである。

○ 一宮川

小菅 香村

傲船林岸發叢行。 疎樾乍看寒水明。

客子不堪舟子懶。 吹烟緩緩出柴荆。』

寄纜卓篙稚竹籬。 垂綸水碧皺紋波。

釣来畢竟獲何物。 未釣之人佳興多。』

(註) 舟を木立の岸で傭って叢から出て行くと、折も折疎らな木立の蔭に冷たくきれいに澄んだ泉のあるのみとめた。客である自分は船頭が懶けて何時迄も来ないので待ちあぐんでいと、船頭は煙草をふかしながら悠々とあばら家を出て来た。釣竿とびくを持ってともづなを解く。糸を垂れると水は青く波が細かく皺立つように穏かだ。釣をして果して何を待たか、と言えば自分はまだ釣人としては老練ではなく大した物は得られなかったが、その興趣は尽きる例を知らない。

○ 一宮橋上紀所見

齋藤 東湾

前面の川から獲られた蜆が鬮(漁具)に盛られて運ばれて来た。

○ 一宮賦雜詠

遠山 雲如

長虹倒影夕陽流。 芦雨柳風涼似秋。

橋上人呼橋下艇。 鯉魚網得幾枚不。

(註) 長い虹が水に倒さに映り夕陽の影が流れている。芦に降る雨や柳に吹く風がまるで秋のように涼しい。橋の上の人が橋の下にいる舟に声をかけた。網を打って鯉を獲たその数は何枚であろうか。

○ 過一宮城墟有感

雄將雄據地。 憑吊賦悲哉。 遺戟埋沙土。 豐碑沒草萊。

骨枯空委地。 名顯豈成灰。 落日荒墟下。 亂蟬惹恨來。

(註) 一宮城の跡をたずねて  
ここはかつて勇將が城を構えた土地である。先人のここを訪ねた偉靈を弔った詩はまことに悲しく感慨が深い。戦いに遺棄された武器は砂に埋もれ、大きな石文を荒廢した草原に没し、戦死したつもの骨も朽ちて空しく土になったが、名は世に顯われて今も亡びずに死灰と化せず明らかである。今まさに日没にあたって荒廢したこの城跡には、時雨れ如く蟬が鳴いて永久に悲痛な情をとどめている。

○ 登高藤山

一宮山称高藤山。 山勢兀聿嶮間関。 一步失脚身顛墜。

後先相如無顔。 登臨振衣踞巖嶺。 遠望銚子近虎視。

海天茫茫無物遮。 吞吐九十九湾水。 地為段落如坡連。

樓櫓馬埒或井泉。 立旗之丘馬鎧谷。 其趾歷々自儼然。

相伝広廣據本土。 此為牙城以講武。 憶昔治承四年春。

率兵数万従右府。 爾来攻戰建偉功。 忠勇之終不空。

芸侯夙復欽遺烈。 建豊碑兮勸精忠。 回首茫茫五百歲。

樓々歌吹也何妨。 聯步思詩占夜涼。

掩映水中兼水上。 一燈光作雨燈光。

(註) 一宮橋の上に立って所見を紀す  
あちこちの楼上からは、何の遮るものもなく、歌声や糸竹の音が聞こえる。自分は歩み続けて夜涼をとりつつ詩を案じた。水中と水上の景色が互いに映り合っつて一つに見え、また水上の一つの灯火が水中に映って二つの灯火となって輝いている。

○ 一宮駅

齋藤 東湾

大厦高楼左右隣。 街頭無地避塵。

斯身幸免轍魚苦。 負擔相憐奔熱人。

(註) 大構えの家や二層三層の建物が連なっていて、街頭は紅塵の巷となつて僅かの空地も無い。自分は幸いにして街中に出ながらも焦熱の苦を免れ得ているが、荷を背負ったり担いだりした人は誰もが暑熱の紅塵の中に悩んで往来している。

○ 一宮駅、駅口架橋、橋下流水潺湲、余借床面水、呼酒水酌、

見水中黄蛭星布、獲数升以爲下物風味絶倫、余雖極小戸、

亦盡杯

星巖

林下借床呼酒杯。 沙明苔綠水潺湲。

餘酣正好作湯喫。 黄蛭星々登罾來。

(註) 一宮駅の入口に橋がかかり、橋の下に水がさらさらと流れている。私は床几を借りて流水に対して腰を掛け酒を呼んで一人酌む。水中に蜆がたくさんいるのを見た。数升を求めてそれは酒の肴として風味絶倫であると思うた。私は頗る下戸であるが人並に杯を重ねた。

林の下に腰掛を借りて酒を飲む。砂は清らかで苔は緑なし、水は岸に沿ってめぐり流れている。酒のあと愉快なあまりに湯を呑んだ。折から

家声赫々千葉裔。 如今幸泰平時。 枯骨感蒙聖王惠。

吾今吊古感慨催。 片石無影何在哉。 好事惡戲寧馨物。

妄意移致遺物來。 城址湮没今勿々。 英雄事迹標無物。

興亡難鑑德難知。 唯見山勢依舊屹。

(註) 一宮山は高藤山と称す。 山勢は突き出て聳え峻嶮な関所の山よりもなお険しい。一歩足を踏みはずせば深い溪谷にでも墜落してしまうほどのようだ。前と後と向き合っても顔が見えない。登りきって衣の裾をほらい巖の先端に立てば、遠く銚子を望み近くに東浪見が見える。海は天の果てまで遙かに見え渡り、九十九里曲浦の波が寄せては返している。そのため地は段落をなして堤の如く連なっている。幾層もある樓や櫓や放牧場の柵、あるいは井戸水、旗を立てた丘、馬の鎧の形をした谷など、その趾がありありと昔に変わらず残っている。その昔平廣常がこの地を根拠にしたと伝えられている。このために要害の城内では武技を練った。思い起こせば治承四年の春、数万の兵を率いて頼朝に従ったが、それ以来転戦して偉大な武功をたてた。その忠勇は結局認められて、安芸の藩主が早くもその功績を賞び伝えるために、大きな碑を建ててその精忠を碑文として刻み込んだ。遠く遙かに顧みると茫茫五百年、家の誉は赫々と輝やき盛んなること千代の末々子孫々にまで語り伝えられている。今や幸いにし

て太平の時に遭遇して、亡き武將の靈は聖天皇の恩徳に感ずるであろう。自分は今日蹟を弔って感慨を催したのである。が、一片の石の影も無いこの実情は一体どうしたのであろうか。ことさらに大仰な挙げ立てをして名跡を亡ぼす悪戯をにくむはむしろこれ物にこだわること、今自分はみだりにこの古人の遺物が移されて跡無きを思うのみで敢えていうに足らないことである。城趾は消え亡びて今は幽かななり。英雄の事物を標す物が何も無い。興亡は鑑み難くその徳は知り難い。唯山勢のみが昔の如く聳つを見るばかりである。

○ 玉前神社

二月朔玉崎明神に詣でて(口まめ草)

大原 幽学



玉垣の前のわたつみあふ空もくまなく照らす神詣出して  
当社はかみつふさの一宮にて殖生郡なれば  
千早ふるはにふの里に跡たれてくにつかつさに梅ぞさき国

○ 玉前神社祭玉倚媛、為本州大祠、敬拜之余恭賦長句二首、  
以似祠主。 齋藤 東海

碧覺画棟耀金門。古廟千年蕙潔繁。華表鶴鳴松月影。  
靈池魚躍水無痕。玉媛隆沢知恩偏。神武偉勳瞻德尊。  
於戲盛哉官幣典。如今猶見旧依存。

一宮之奥仰崇祠。祭在神明玉倚姫。維石巖々銘盛徳。  
有林蔚々表靈姿。朱堂雲閣藏神物。碧殿風高唱祝詞。  
鏡鼓穠年禾稔熟。偉哉雨露聖恩施。

(註) ○玉前神社は玉倚媛を祀る。日本でも大きな社なり。参拝したあとで、恭しく長句二首を詠じて神主に捧げる。

青色の瓦と美しく描かれた棟の模様は金門に耀く。千年を経た古い社には鷹が清く繁っている。鳥居のあたりに鶴が鳴いて松の木に月影が宿る。池の魚が水に躍ったあとは誠に静かで、玉倚媛の盛んな恩沢が広く行き渡っていることを知る。また神武天皇の功業の偉大で神徳の高き姿が見られる。ああ盛んなるかは官幣の祭りは。昔の姿がそのままに存して今なお見ることができるとは。一宮の奥にあらたかな社が仰がれる。祭神は神明玉倚姫である。あちこちと建てられた碑には盛徳が刻み込まれている。林が鬱蒼と茂っていて莊嚴な姿を表わしている。朱塗りの堂は高く聳え神の宝物を蔵している。青い神殿から祝詞を唱える声が風に乘って高く聞こえる。つづみの音は豊かな五穀の稔りを祝って鳴りひびく。まことに偉大である上聖代のみ恵みは。

○ 金毘羅尊(御詠歌)

弓湾。故漁人下脩網甚便、鰻魚之利冠諸州。

梁川 星巖

海勢勾連上下総。千家曝網夕陽風。

行々九十九有里。一路潮声松影中。

(註) ○東の銚子港より西の東浪見崎に至るを九十九里という。海岸は平らで浅く、一張の弓のような形をしている。それ故に漁師が下りて行って網を使うのに甚だ便利である。鰻魚は諸国第一なり。

上総と下総の海岸が半円をなして、たくさん漁家が網を夕陽の風に晒している。行く行く九十九里の、一条の道を進めば松の木の間から潮騒の音が聞える。

○ 九十九里

梁川 星巖

只多漁罟少農耕。海甸茫茫不見城。

云是南中風俗異。也能粗糲作人情。

(註) この九十九里では漁網を業とする者が多く農耕を業とする者が少ない。海辺の地は茫茫として城のようなものはない。世に謂われている、南と中央とでは風俗が異なっていると。また女子が良い人情を作っている。

○ 九十九里口上

梁川 星巖

海風五月爽於秋。總北総南未取。

行尽平沙一百里。倚天峭壁是房州。

(註) 五月の海風は秋よりも爽やかである。総北総南も梅雨が未だ上からない。九十九里の砂浜を歩き尽くした所、遠く天に連なる険しく片寄っている地、それが房州である。

梁川星巖は寛政元年美濃国の生まれ、通称を新十郎といった。星巖・天谷・百峯・老竜庵などの号がある。江戸に出て古賀精里、山

ほのあけてみるも高くし法の庭

諸人集ふ 朝も 夕も

一ノ宮金毘羅尊に月参りして

林 豊栄

もろ人の願ふ心はいかばかり

一ノ宮金毘羅尊をあがめて

百とせの春はきたらん老が身の

限りあるまでみなを唱へて

同人

○ 軍荼利山(天保二年十二月)

二十八日軍荼利山に詣でて(口まめ草)

大原 幽学

眼の届く丈は長閑や浦の春

○ 登軍荼利山

齋藤 東海

琳宮拔地高。浄潔與他異。磴道峻難攀。柱笏心瑞々。

老柏大蔽牛。古松刺天翠。一禽飛無蹤。白雲護僧睡。

(註) ○軍荼利山に登る

寺は地を抜いて高く、浄潔であることが他と異なっている。石段の険しい道を登れば、竹の杖をついて心は満ち足りて清らかなになる。老柏は牛を蔽う大木よりも大きく、老松は青空を貫いて聳えている。一羽の鳥が飛び去ったあと、静かに白雲が僧の住む坊舎を護るようになびいている。

○ 九十九里

東從銚子港、西至虎視崎、謂之九十九里、海濞平浅、形勢一

本北山の門下となり、のち玉池吟社を江戸神田お玉が池に開き、四方の吟客を集めて相唱和す。晩年京都に移り、慷慨家の正四位を贈らる。安政五年、七十歳で歿した。

浪淘集は梁川星巖が天保十二年春、房総三州漫遊の際のものしたる詩集也。即行徳より北総相馬に至り銚子に出で九十九里沿岸を経て一宮・太東に遊び房州を経て江戸に帰る。

○ 九十九里

安積 長齋

雲海茫茫望壯哉。平沙薄暮獨徘徊。

似蘆船接九天去。如屋波從萬里來。

烟霧合邊疑結屐。雪山崩處激奔雷。

直連東極終無地。唯有金烏往復回。

(註) 雲海茫茫として海を望めばまことに雄大である。砂浜を黄昏時に独り何処ともなく歩くと、蘆の葉のように小さな舟が遙かの空に接して遠く去って行き、屋根のように大きな波が万里の彼方から寄せて来る。水霧の立ちけむる沖合には今にも雷鳴が立ちはしないかと思われる景色である。高波の崩れるところは雷鳴の轟くようである。直ちに東の泉で遠く連なる無限の彼方に、唯一羽の金色に輝く鳥が往きまた帰りながら飛んでいるのが見える。

○ 九十九里所見

淺川 善庵

潮高海濶夕陽陰。一葉漁舟浮又沈。

百尺風波奇險極。妻孥見慣不關心。

(註) 潮が高く逆巻き海はひろびろとして夕陽が陰っている。折柄一艘の漁船が浮かんだり沈んだりして、百尺の高さに荒れ狂う風波は危険の極にあるけれど、見慣れぬ者には奇らしく、また漁家の妻子は見慣れている。全く心にもかけず平気である。

朝川善庵は天明元年江戸に生まれ、本姓を片山、名は鼎、字は五鼎・善庵・學古熟の号がある。山本北山に学ぶ。

北山兼山の季子。朝川黙翁に養わる。帷を江戸本所小泉町に下して教授す。経学は折衷を主とす。嘉永二年、六十九歳で歿した。

○ 九十九里所見

藤森 弘庵

噉紅影裏雨舟開。 巨網忽看截波來。

鷗翅蔽空人語鬧。 聲々報道大漁回。

夜天粘水訝無州。 前路何辺是客郵。

人影在沙風獵々。 月明九十九灣秋。

(註) 朝日のくれないの影がさすうちに二隻の舟が両方に分かれ、大きな網が忽ち波を切つて曳かれて来るのが見える。折から鷗が群がって空を蔽い漁師の聲が騒がしく、声々に大漁、大漁と報じて帰って来る。夜の帳が下りて海を蔽うと陸地は全く見えなくなり、行手も分からずどのあたりが宿場であったのか見当がつかない。砂浜には人影がほのめき風が獵々の音を立てて吹き、月は明らかに九十九里の弓湾を照らして今や秋のさなかである。

藤森弘庵は寛政十一年江戸の生まれ、通称を恭助といった。柴野碧海、長野豊山、古賀穀堂に学んだ。最も詩をよくし、文久二年、六十四歳で歿した。

○ 九十九里

山口 重民

鮮鱗一樣躍沙泥。 九十九灣漁唱齊。

如此奇觀何処在。 鱷魚橫路築銀隄。

(註) 鮮魚が砂浜に上げられてどれも一様に砂上に躍っている。九十九里の浜にはあちらにもこちらにもひとしく大漁を祝う漁師の聲が聞える。このような珍しい見物が何処にあるだろうか。鱷が道に横たわって銀

の堤を築いているではないか。

○ 九十九里を詠む

伊藤左千夫

九十九里の磯のたひらは天地の

四方の寄合に雲たむろせり

春の海の西日をきらふ遙かにし

虎見が崎は雲となびけり

白砂のかわける濱に鷗かも

ふめる足あとあやにめずらし

砂原と空と寄合ふ九十九里の

磯行く人ら蟻のごとしも

○ 九十九里に遊ぶ

香取 秀真

大空の大きぬがさは覆はれし

海も松原も平たくありけり

天津日のたゞに照せる砂原の

砂あつけれど風はずゞしも

磯を呑み磯を吐きつゝ大浪の

よせてかへしてやむ時しらずも

濱づたひ遠くうち見れば霞みけり

浪のしづぎに人もかすみけり

○ 九十九里に滞在

若山 牧水

夜いでゝ浜に立てれば九十九里の

浪のとどろき四方にあがれり

雨雲のかきくだり来て九十九里の

海のまなかにへどふとすらし

和 歌

漕ぎ出でて十里になれば見えずなるといふ

太東岬の端(ハナ)の真白き

○ 九十九里を諷詠した俳句

九十九里 月のおもてや 時鳥 元安岐

霞ふむ濱や どこまで九十九里 星丸

枯芦の上ふむ道や九十九里 万里

砂ふくや 萩の日かげの九十九里 沼人

五月雨や人にも逢はぬ九十九里 素養

網あげて鯛散らばる濱辺哉 子規

九十九里霞むや濱の網ほつち 愚佛

(玉前神社にて)

青葉若葉人人は地に神に生く 斎藤 竹仙

み鏡ははつ夏の朝をすめりけり

朝の日筋銀杏若葉の濡れ色に

紺碧の空ゆ新緑 滴るる

なお玉前神社境内には芭蕉の大きな句碑がある。

叔慮にて賑ふたみや庭かまど はせを

ここでひとことふれておくことは、昭和八年ころ、斎藤一(号竹

仙)氏を中心とした地上社という作句グループが生まれた。これは斎藤氏の努力によって戦争中でも中断することなく現在までつづけられており、北海道から九州に至るまで、会員を集めるようになった。一宮に訪ねて来た作家、詩人、俳人などはよく「作句通信」という句集に作品を発表している。いま参考までにそのうちのいくつかを記してみよう。

晴間見せし松の空より秋の声 室積波那女

避暑の宿 百日白を晒しけり 室積 徂春

秋の声 海の白馬に聴かれけり 同

潮浴びや 砂山越ゆる道二つ 同

驟雨一過西瓜抱えし人の行く 白鳥 省吾

売りのそぐ白雨の中の西瓜かな 同

配給の大根と芋の白と赤 中沢 弘光

富士ありて海見る丘のみかん黄に 同

秋風や実れる筥麻と実らざる 上田 広

秋すでに川の流れにうつりけり 同

草葺の入母屋深し 柿紅葉 吉田 登穀

かぎりなく雁行き磯に雲流れ 大川丹沙郎

紙を貼る畳も見えて梅の寺 田中 蛇湖

浪に降る雨のつれなし暮るる海 高橋 采和

銀河濃しこの寺去ると決めしより 見学 玄

牡丹雪消ゆる水面を見つめ居り 坂 平安